慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	阿騎野遊猟歌考
Sub Title	A study of the songs composed for the hunt at Akino field
Author	梶, 裕史(Kaji, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.53, (1988. 7) ,p.24- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

阿騎野遊猟歌考

梶　裕　史

＊

由緒正しい宮廷歌を集めた万葉集巻一のなかでも、質・量ともに最も充実しているのは「藤原宮御宇天皇代」の雑歌であろう。この御代、すなわち持統朝の雑歌の大半を、柿本朝臣人麻呂が制作している。すべて、持統宮廷の精神史を探り得るほどの重みを持った歌々であるといえる。その内に、「阿騎野遊猟歌」と通称される歌群がある。

軽皇子宿二安騎野一時柿本朝臣人麻呂作歌

45　八隅知之　吾大王　高照　日之皇子　神長柄　神佐備世須等　太敷為　京乎置而　隠口乃　泊瀬山者　真木立　荒
山道乎　石根　禁樹押靡　坂鳥乃　朝越座而　玉限　夕去来者　三雪落　阿騎乃大野尓　旗須為寸　四能乎押靡
草枕　多日夜取世須　古昔念而

短歌

46 阿騎乃野に　宿旅人　打靡　寐毛宿良目八方　古部念尓

47 真草苅　荒野者雖有　黄葉　過去君之　形見跡曾来師

48 東野炎　立所見而　反見為者　月西渡

49 日雙斯　皇子命乃　馬副而　御猟立師斯　時者来向

以上の長歌一首・短歌四首に、すでに多くの優れた研究が重ねられている。本稿はそれら先学の業績をふまえつつ、さらに新しい視点を模索して、当歌群を見直してみようと試みるものである。

(一) 二重表現

まず長歌をみて誰もが気付くのは、きわめて堂々たる詞章をもって軽皇子を形容していることである。「ⓐやすみししわが大君　高照らす日の御子　ⓑ神ながら神さびせすと　ⓒ太敷かす都を置きて」――私達は題詞を提供されているから、これが軽皇子に捧げられた詞章であると知って考えることができる。がもし題詞が無かったならばどうであろうか。傍線ⓐの言い方だけならば、天皇以外に皇子にも用いた例がある(1)。がⓑⓒと続くと、もはや完全に天皇用の詞章である。誰が聞いても、まさか一皇子を形容したものとは思うまい。

軽皇子(のちの文武天皇)が亡父日並皇子尊を偲んで宇陀の阿騎野を訪れたのは、通説では持統六年(692年)冬と推定さ

れている。今この推定に従うと、軽皇子はこの時十歳に過ぎない。しかも題詞には「皇子」とあるが、その父日並は皇位に就かずして持統三年に薨じている。だからこの時軽は、正確には皇子ではない。「軽王」である。このような少年王子に、最高級の詞章が捧げられているわけである。

言い方を変えると、主人公の個性、或いは人格の表出といったことはきわめて稀薄であるといえる。短歌をみても、四七番歌には「黄葉の過ぎにし君が形見」とあり、四九番歌には「日並の皇子の命の馬並めて」とある。軽皇子を眼前にしながら、歌では父日並が前面に出て、軽の映像は隠れてしまっている。

天武天皇の第一皇子日並(草壁)は、万葉集でも日本紀でも、天皇に準じた扱いを受けた跡がうかがえる皇太子である。すると、長歌におけるその子軽の堂々たる形容も、そのような亡父との二重映しの心意の表われとみれば、納得できるものがある。つまり軽皇子には、亡父の跡を継ぐ貴種として大きな期待が寄せられていた。その心意は、年少の軽を故皇子尊の再来と仰ぐという形で表われた。それで長歌では、堂々たる王者の姿を描く詞章が用意された。続いて短歌では、まさしく眼前に故皇子尊の英姿があるかのような歌い方が採られた、とこのように理解されるのである。

この二重表現は、当歌群を論じる際には必ず指摘されることであるが、同様の発想による詞章は、外にも例を見出すことができる。

日並皇子および高市皇子に捧げられた挽歌の長歌(万葉集巻二　一六七・一九九)に、その典型がみられる。いずれも柿本人麻呂の詠作である。

① 天地の　初の時　ひさかたの　天の河原に　八百萬　千萬神の　神集ひ　集ひいまして　神はかり　はかりし時に

天照らす　日女の命　天をば　知らしめすと　葦原の　水穂の国を　天地の　依相の極　知らしめす　神の命と　天雲の　八重掻別けて　神下し　座せ奉りし　ⓓ高照らす　日の御子は　飛鳥の　浄の宮に　神ながら　太敷きまして　ⓔ天皇の　敷きます国と　天の原　石門を開き　神上り　上り座しぬ　ⓕ吾が大王　皇子の命の　天の下　知らしめしせば……（巻二　一六七）

右の日並皇子挽歌では、傍線ⓓで皇孫ニニギノミコトと天武天皇とが、また傍線ⓔで皇祖歴代の天皇と天武天皇とが、それぞれ二重映しにされていると認められる。肝心の日並皇子は、傍線ⓕに至ってようやく登場する。主役は日並皇子なのにそれではおかしいとして、傍線ⓓも日並、ⓔは持統天皇を指すと解釈する向きもある(2)。それほど、人称にとまどいをおぼえる詞章なのである。

② かけまくも　忌しきかも　言はまくも　あやに畏き　明日香の　真神の原に　久堅の　天つ御門を　懼くも定め賜ひて　神さぶと　磐隠ります　ⓖやすみしし　わが大王の　聞こしめす　背面の国の　真木立つ　不破山越えて　狛剱　和射見が原の　行宮に　天降り座して　天の下　治め賜ひ　食国を　定め賜ふと　雞が鳴く　東の国の　御軍士を　召し賜ひて　ちはやぶる　人を和せと　まつろはぬ　国を治めと　皇子ながら　任し賜へば……（中略）……ゆく鳥の　争ふはしに　渡會の　齋の宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず　常闇に　覆ひ賜ひて　定めてし　水穂の国を　神ながら　太敷きまして　ⓗやすみしし　吾が大王の　天の下　申し賜へば……（巻二　一九九）

この高市皇子挽歌でも、たとえば傍線ⓖは天武天皇、ⓗは高市皇子、と合理的に判別して考えるよりも、天武・高市の二重映しとみるのが適わしいような、渾然とした詞章が展開している。私達は文字で記録されたものを読み返せるからよいが、これが発唱された場に居合わせたとしたらどうであろうか。一度聴いた位では、明確な人称の区別などつかないにちがいない。

とにかく、①②のどちらも、亡くなった本人に捧げられた歌でありながら、その父天武あるいは皇孫ニニギノミコトが想起されている。これは現代人には不思議なことである。しかし、それら皇祖と故人とを重ね合わせることが、おそらくは故人の生前を称えることに結びついたものと考えられる。偉大な貴人の子孫を、その過去の貴人と二重映しにし、その直系なるを明示することによって讃美するという発想が存したのである。

してみると、二重表現の詞章は、同時に無時制の詞章でもあったと察せられる。軽皇子の場合でいうと、過去にあったこと――日並皇子が阿騎野を訪れた「古昔（いにしへ）」――をもって、皇子の現在から未来にかけてを称えているということになろう。

ところで時を超越した詞章といえば、外に思い当たるのは祝詞のそれである(3)。「大殿祭」「六月晦大祓」「中臣寿詞」など、『延喜式』祝詞のどれを参照してもよい。神代にあったことが語られ、アマテラスの孫の資格で「皇御孫尊（すめみまのみこと）」が登場するが、それがいつの間にか今上天皇になる(4)。過去・現在の区別がない詞章となっている。換言すれば、「皇御孫尊」・今上天皇の二重映しであり、固有の人格には無縁の詞章ということになる。先の日並皇子挽歌の冒頭などは、これに非常に近いものであると見なされよう。

こうして類型を辿ったうえで、再び当歌群の二重表現に戻ってみる。するとそれは、政治的誇張でもなければ、作者

の卓越した詩心の産物でもなく、古代的思考法に基づいた発想であったとの見解に導かれる。同時に、古態を留めた祝詞などとの比較により、人麻呂の詩才によって洗練された跡も、はじめて明らかになるのではないか。

(二) 四八番歌研究史概観

長歌に続く短歌四首は、漢詩の起承転結になぞらえられるほど、見事な展開をみせていると評される。その内で「転」に相当するのが四八番歌である。賀茂真淵の改訓により生命が吹きこまれ、集中屈指の有名歌となった。実はその訓には今なお問題が残るが、ここでは一首の内容面に絞って、問題点を確認してみたい。

当歌は、一昔前までは純粋な叙景歌とみられ、黎明の荘厳な景観を写した歌として鑑賞されていた。斎藤茂吉の残した評言(5)などに代表される鑑賞態度である。

ところが現在では、当歌は単なる叙景歌ではない、との見方に傾きつつある。具体的には、東にさし染めた曙光と西に傾く月との対照に、何か寓意があるのではないか、といった着想に端を発している。「かぎろひ」には軽皇子、「月」には故日並皇子の暗示がある、と最初に示唆したのは窪田空穂である(6)。この見方を上野理氏(7)身崎壽氏(8)などが継承され、それぞれ発展させている。このように寓意を考える、特に「月」に日並皇子の暗示を読みとる根拠としては、

○神代紀に月読命に関して「日に配(なら)」ぶものとの記載がみえること

○日並皇子挽歌の反歌(一六九)に「あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」と歌われていること

などがあげられている。

この視点はさらに深化して、その夜と朝との交代に、王権の交代を重ね合わせる見方を引き出してくる。そこで、この阿騎野の歌の背景に、軽皇子の成年式のような儀式を想定する説も行われている。すでに上野氏が、古代の狩猟の持つ成年戒的な一面に着目されているのだが、坂下圭八氏(9)はそのうえに、阿騎野行は持統六年の冬至の頃であろう、との有力な推定があること(10)を参看された。それでこの行旅は、大嘗祭的な性格を持った、軽皇子の新生の儀式であったのではないか。すなわち軽皇子は、一晩阿騎野に宿って子供として死に、翌朝大人として――日並皇子の再来として甦る。そしてこの劇的な再生復活の瞬間をうたったのが四八番歌である、とこのように考えられた。なお森朝男氏にも類似の所論があるが(11)、森氏は儀式の実施の有無は問題にされず、人麻呂の詩的想像力を重視されている。その点、坂下氏の論とは一線を画すものと判断される。

また、直接に四八番歌から導かれたかどうかは不明だが、池田彌三郎氏(12)・山本健吉氏(13)なども、この行旅について「皇太子たるべき神聖な資格を得るための、真冬の鎮魂の山ごもり」といった見方を発表されている。

一方、このように歌の場の想定を当歌の解釈に援用することをきらう立場もある。この立場では、当歌の光景は、かつての日並皇子の御猟の時にもみられた光景であって、奇しくも往時と等しい景観が得られた。その感動をうたったのが当歌である、と考えている。伊藤博氏(14)・稲岡耕二氏(15)などがこの見解を示されている。

以上のように、四八番歌をめぐっては、阿騎野遊猟歌全体の意味付けにも関わる議論が重ねられてきた。結局、未だに定説を見ないが、当歌の「かぎろひ」「月」が何を意味するのか、という問いが顕在化していることは確かであるといえよう。

(三) 日と月と

本章では、日本文学の素材としての「日」「月」という観点から、四八番歌を見直してみたいと思う。

一体、黎明の一瞬を捉えた歌、しかも東西に日月を対照させた歌となると、万葉集はもちろん、後の勅撰和歌を調べて行っても、容易に見出せるものではないと予想される。

③ さしのぼる朝日に君を思ひ出でん傾ぶく月にわれを忘るな(金葉集・別離・三五九)

④ 風になびく尾花が末にかげろひて月とほくなる有明の庭(風雅集・秋下・六三四)

右二首は偶然目に留まったものだが、単に時刻・光景が似ているというだけである。類型というところまで共通点を抽き出せそうにない。四八番歌は孤立した歌、類型なき歌であるように思われる。

とはいえ、手がかりが皆無というわけでもない。さしあたり万葉集で、「月かたぶきぬ」の全用例を集めてみる。

⑤ 君に恋ひしなえうらぶれ吾が居れば秋風吹きて月斜焉(かたぶきぬ)(巻十　二二九八)

⑥ 真袖もち床打ち払ひ君待つと居りし間に月傾(かたぶきぬ)(巻十一　二六六七)

⑦ ねばたまの夜は更けぬらし玉くしげ二上山に月加多夫伎奴(かたぶきぬ)(巻十七　三九五五)

⑧ 秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月可多夫伎奴(かたぶきぬ)(巻二十　四三一一)

おおむね、夜が明けてしまうのが惜しい、悲しい。思う人を待っているのに、逢えないままもう夜が明けてしまう、

とマイナスの心象で月を眺める類型が認められる。しかしこの類型は、当四八番歌の場には適わしくない。この阿騎野行の場合は、夜明けはむしろ待ち望まれたはずとみられるからである。よって「月かたぶきぬ」の用例は、当歌を解く参考にはなりそうにない。

ところが、万葉集中に次のような三首がある。

⑨ 朝日影匂へる山に照る月の飽かざる君を山越に置きて(巻四　四九五)

⑩ 朝月の日向の山に月立てり見ゆ　遠妻を持ちたる人し見つつ偲はむ(巻七　一二九四)

⑪ 朝月の日向黄楊櫛古りぬれど何しか君が見れど飽かざらむ(巻十一　二五〇〇)

傍線部のように、「朝日を受ける残月」という景象が序歌を形造っている。序歌を形成するということは、それが単なる偶然の叙景ではなく、或る普遍的な心の傾きをもって眺められていたことを示すと考えられる。そしてその心意は、決して負のイメージではなかった。なぜなら⑨で、朝日を受ける残月は「飽かざる」という語を引き出している。すなわちそれは、非常に望ましい光景として印象されていたものと推察されるのである。

こうして暁方の月は、明るい心象風景として眺められることもあった。このことに留意したうえで、今度は次の歌々に注目したい。

⑫ 玉藻よし　讃岐の国は　国柄か　見れども飽かぬ　神柄か　ここだ貴き　天地　日月と共に　足り行かむ　神の御面(みおも)と　つぎきたる……(巻二　二二〇)

⑬ 天地の　遠きが如く　日月の　長きが如く　おしてる　難波の宮に　わご大王　国知らすらし……（巻六　九三三）

⑭ ……ももしきの　大宮人は　天地　日月と共に　万代にもが（巻十三　三二三四）

⑮ 天なるや月日の如く吾が思へる君が日にけに老ゆらく惜しも（巻十三　三二四六）

万葉集では右のように、「日」「月」が一対となって頌詞を形成した例が見出せる。そしてこの類型は、宣命にもある。

⑯ ……此者叀立尓不有。天尓日月在如地尓山川有如並坐而可有止言事者汝等王臣等明見所知在。……（続日本紀天平元年八月二十四日。光明子を皇后とする詔）

さらにこの伝統は、後代の勅撰集の賀歌にも引き継がれている。

⑰ 君が代は千代ともささじ天の戸やいづる月日の限なければ（新古今集・賀・七三八）

⑱ ひさかたのあまのかご山そらはれていづる月日もわがきみのため（続古今集・賀・一九一五）

⑲ くもりなき月日の光いくめぐりおなじ雲ゐにすまんとすらん（玉葉集・賀・一〇九二）

⑳ 月も日も光をそへてあきらけき君が御代をばさぞてらすらん（続千載集・賀・二一三四）

㉑ くもりなくてらしのぞめる君が代は月日とともにつきじとぞ思ふ（風雅集・賀・二一六六）

㉒ あまのはらめぐる月日のさやかにも万代すめる雲のうへかな（新続古今集・賀・七七二）

引用はこの程度に留めるが、「日」「月」一対で讃め詞を形造る伝統が、後世まで脈々と続いたことが知られるであろう。

そこで思うに、もし太陽と月とが同時に天空にあるという実景が得られたら、その景観は非常にめでたい気分を誘ったにちがいない。

ここで阿騎野行の朝のことを振り返ってみる。通説では、軽皇子の将来に重大な行旅であったと考えている。もしその通りであったならば、その夜明けは祝賀の気分に満ちていたことであろう。とすれば、四七番歌の「かぎろひ」と「月」とは、一方が陽、一方が陰と、対照されて眺められたというよりは、どちらも晴れ晴れしい景象として、一首をめでたい気分で貫いているのではないか。

もちろん、日並皇子の薨去ということが、この行旅の間に懐顧されることはあったであろう。それに、第五句「月西渡」を今のところ「月かたぶきぬ」と訓む外ないとすると、沈んでゆく月という捉え方には、やはり哀惜の気分の投影があるようにも思える。しかしそれでは、何か気分の統一に欠けた歌になってしまうのではないか。「月」に日並の投影があることを否定はできないとしても、その晴れやかな朝に、ことさらに故人を哀傷するような不調和な気分はなかった、と考えるのが自然であろう。

そこで改めて結論すると、当歌は、「日」と「月」とが同時に天空にあるという晴れやかで厳粛な景観をもって、軽皇子の将来を祝福した歌であった、と考えておきたい。

(四) 阿紀神社のこと

さて、宇陀の阿騎野という土地の性格は、古来の狩猟地であったと説明されるのが恒例である。確かにその通りであるが(16)、私見ではそれだけではないように思われる。特に四八番歌の解釈に、さらに或る可能性をひらくようなヒントが見出せる。

それは当地にある阿紀神社という古社である。『延喜式』の神名帳に名がみえているこの社は、寛永十年(一六三三年)の社記(17)によれば「天照大神の御本地」で、「明山神戸(あきやまかむべ)」と言ったとある。承応二年(一六五三年)九月の銘をもつ境内の石燈籠には「神戸大明神」と刻まれている。

神戸とは伊勢神宮の封戸のことであるが、神宮側の記録であるところの『太神宮諸雑事記』には、次のような記載がある。

㉓ 垂仁天皇壽百卅。

天皇即位廿五年丙辰、天照坐(シス)皇太神、天降坐(リス)於大和國宇陀郡(ノニ)。于(ノ)時國造進(タテマツルカンベ)神戸等(ヲ)。今號(スニ)宇陀ノ神戸(トニ)是也 是(レニ)巳皇太神宮、始(メテ)天降坐(ス)本所也。其後奉(ルレ)令(シメメ)鎮(サニ)坐伊勢國度會郡宇治(ノ)郷五十鈴川上(ニ)、……

当地は天照大神が初めて天降りました所で、この時国造が神戸を奉った。これが宇陀の神戸である、と伝えている。ちなみにこれは、『延喜式』伊勢太神宮の封戸の条に「大和國十五戸」とあるのに相当すると認められる。そしてこれ

は畿内で唯一の神戸であった。田中卓氏は『伊勢神宮の創祀と発展』で、「この畿内唯一の宇陀の神戸は、神宮とヤマト朝廷とをつなぐ要のような大切な役割を果たしていたといってよい。」と述べられている。

つまり整理すると、『延喜式』神名帳の阿紀神社と、同書の伊勢太神宮の条にみえている宇陀の神戸とは、神宮との関係という点で明らかに密接なつながりをもって、少なくとも『延喜式』が編まれた頃には、確実に存在したことが知られるということになる。

現在の社殿は神宮と同じ唯一神明造で、南面している。いかにも伊勢との連がりを主張していることが窺え、寛永十年の社記によると往古は式年遷宮もあったというが、創建当初からそのような様式であったかどうかは知るすべがない。がともかく、『延喜式』編纂時よりさらにその存在が遡ることを探り得る資料はある。

㉔ ……爾時倭姫内親王、太神乎頂奉弖、願給國求奉時爾、従二美和乃御諸宮一發弖令出坐支。……彼時、宇太乃阿貴宮坐只。次佐々波多宮坐只。其爾即大倭國造等、神御田并神戸進只。……(皇太神宮儀式帳)

右のように、延暦年間に編まれた『皇太神宮儀式帳』によると、垂仁天皇代、倭姫命が天照大神を斎いて、大和から巡歴の旅に出た経路のなかに「宇陀ノ阿貴ノ宮」の名がみえている。また『太神宮諸雑事記』の養老六年(七一九年)の条には、次のようにある。

㉕ 養老六年壬戌三月三日、大和國宇陀ノ神戸司進ルニ於神祇宮一申文云、年中四箇度ノ御祭、臨時奉幣執幣丁朔日奉二稲富一自二上古時一、爲二譜第之者一、専無二他役一。而以二去二月廿七日一爲二散位懸造宿禰吉宗一被二打損一了者。仍上奏已畢。随

則以二同年五月七日一、件吉宗被レ配二流隠岐國一。

宇陀の神戸の司が神祇官に申したところによると、当地には上古の時より、伊勢神宮の祭の時に、祭料米を奉ることを職掌とするところの譜代の丁がいるという。西暦七一九年の時点における「上古」という言い方から推して、阿紀神社と神戸の存在は、持統朝、つまりこの軽皇子の阿騎野行の頃までは十分に遡る可能性があるとみてよかろう。

軽皇子は天武天皇の嫡孫であるが、そもそも天武は、壬申の乱を契機に伊勢の神と深い関係を持ったとみられる天子である。伊勢神宮の地位が飛躍的に上昇してくるのは、天武朝以降であると考えられている。そこで天武紀にみえる次の記事に注目したい。

㉖ 是日(天武元年六月二十四日)、發レ途入二東國一。……即日、到二菟田吾城一。……於二此時一、屯田司舎人土師連馬手、供二従賀者食一。……過二甘羅村一、有二獵者廿餘人一。……則悉喚令二従駕一。……運二湯沐之米一伊勢國駄五十匹、遇二於菟田郡家頭一。仍皆棄レ米、而レ乗二歩者一。到二大野一以日落也。……

㉗ (九年三月二十三日)幸二于菟田吾城一。

壬申の乱前夜、天武が吉野を発って東国へ向かう途次、最初に立ち寄った所として「菟田吾城」の名がみえている。また天武九年には、単独の行幸地として再び「吾城」の名が出てくる。

天武皇統にとって、その祖天武天皇は言うまでもなく崇高な存在であったろう。するとその聖帝天武が訪れた土地というのは、例えば持統朝の吉野がそうであったように、聖地として記憶されていたにちがいない。

こうして天武が二度訪問しているアキ、天武天皇ゆかりのアキ、という点に着眼すると、その孫・軽皇子の将来に重大な旅行地としてアキが選ばれた由縁も、初めて納得できるものがあると思われる。そしてその由縁とは、天武の伊勢の神への信奉と関連する、と考えることも可能ではあるまいか。

㉘ (天武紀二年)夏四月丙辰朔己巳、欲レ遣二侍大來皇女于天照太神宮一、而令レ居二泊瀬斎宮一。是先潔レ身、稍近レ神之所也。

参考までであるが、宇陀のすぐ隣の泊瀬は、天武朝に斎宮に任ぜられた大来皇女の潔斎の場に選定されている。宇陀も泊瀬も伊勢への道筋に当たり、ともに山がちで水清らかな土地という点で、土地柄は類似する。

また先掲の㉖の記事には「甘羅(かむら)村」なる名がみえているが、これも注目してよい地名である。というのは、現在阿紀神社のある森から、宇陀川・大宇陀の町並みを経て、ちょうど東に城山という山があり、その麓に「神楽(かぐら)岡神社」という小社がある。ここに往時の甘羅の地名の名残があると推定されるが、その社殿が阿紀神社同様、唯一神明造である。現在の神楽岡神社は新しく、旧社地はやや北寄り、同じく城山山麓にある春日(カスガ)神社だというが、宇陀川の清流をはさんで東に春日、西にアキの地名があり、ともに伊勢神宮と同じ様式の社を持っているというのは興味深い。

以上のような資料より推察するに、宇陀の阿騎という所は、天武・持統朝において、或いは伊勢神宮の前衛地、遥拝地といった性格を持っていたのではないか。

現在、阿紀神社のある森の東方すぐ近くの小丘に人麻呂歌碑が立ち、「かぎろいの丘」なる公園となっている。訪れてみると、なるほど見晴らしの効く好適地を選んだものだと感心させられる。そこに立って東西を眺めながら、改めて実感したことは、そこが四八番歌の詠地であったとは決められないものの、当歌にうたわれたような雄大な景観は、現

地(現大宇陀町)の高台からでないと望めないということだ。地形的に判断して、どこからでも見られるというわけではない。とすると軽皇子一行は、あらかじめその景観の到来を期して、つまり高台にて曙光を待っていたとも考えられるであろう。

ところで、日の出に言寄せて天子の御代を祝福するという類型は、のちの勅撰和歌に数多く見出せるところである。次にその一例をあげてみる。

㉙　春宮の生まれたまへりける時にまゐりてよめる　典侍藤原因香朝臣
峰たかきかすがの山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり(古今集・三六四)

㉚　いはひの心をよみ侍りける　大宮前太政大臣
君が代はあまのかご山いづる日のてらむかぎりはつきじとぞ思ふ(千載集・六〇九)

㉛　宝治百首歌の中に寄日祝といふ事を　冷泉前太政大臣
みかさ山峰たちのぼる朝日かげ空にくもらぬよろづよの春(風雅集・二一六一)

山階入道前太政大臣
岩戸いでし日かげは今もくもらねばかしこき御代をさぞてらすらん(同・二一六二)

また祝詞にも、「今日の朝日の豊栄登(とよさかのぼり)に」といった言い方が頻出する。このように朝日を眺める心意と、宇陀の阿騎という土地柄とを考え合わせてみる。すると、「東の野に炎(かぎろひ)の立つ見えて」と東方の曙光を仰いだ一行の心には、伊勢の神(天照大神)遥拝という意識があったと推察することも可能であろう。そしてもしそのような心意に満ちていたとす

れば、やがて昇った旭日は、軽皇子祝賀の気分を大いに盛り上げたことであろうと考えるのである。

(五) 持統十年の冬

結びに、阿騎野遊猟歌の作歌年次について考察してみたい。

先に(一)で述べたように、通説は持統六年と推定している(18)。巻一の歌が年代順に配列されているという目安から、当歌群の位置を見定めて算定したものである。

ところが管見に入ったところでは、池田彌三郎氏が持統十年と、もう少し下らせた年次推定を行われている。

○持統元年(六八七)において、持統天皇四十三歳。その御子、皇太子草壁は二十六。草壁の御子、軽皇子は五歳。その翌々年、持統三年には草壁は二十八歳でなくなっている。その後、天武天皇の御子の一人、高市皇子が皇太子となり、これも帝位に即くことなく、持統十年七月十日になくなっている。この人麻呂長歌短歌の軽皇子の御幸は、その年の冬ではなかったか。そして翌年二月、軽皇子は皇太子となり、八月一日、十五歳で即位した。文武天皇である。

(慶応義塾大学通信教材『国文学』)

わずかこれだけの発言であるが、この推定は明らかに高市皇子への着目から導かれている。すなわち高市皇子は、日本紀・万葉集に「後皇子尊」と表記されていることからして、草壁皇子薨後、皇太子になっていたのではないか。そして持統十年七月にその高市が薨じて、はじめて軽皇子に順番が回って来たのではないか、とこのような考察の筋道であると察せられる。

果たして高市皇子が本当に皇太子となったかどうかは、現存の資料では明らかにし得ない。しかし、持統朝の重鎮であったことは確実な人物である。この高市皇子亡きあと、皇位継承問題が紛糾したことは、『懐風藻』に記録がある。

㉜ ……高市皇子薨後。皇太后引二王公卿士於禁中一。謀レ立二日嗣。時群臣各挾二私好一。衆議紛紜。王子進奏曰。我國家爲レ法也。神代以来。子孫相承。以襲二天位一。若兄弟相反。則亂從レ此興。仰論二天心一。誰能敢測。然以二人事一推之。聖嗣自然定矣。此外誰敢間然乎。弓削皇子在レ座。欲レ有レ言。王子叱レ之。乃止。皇太后嘉二其一言定一國。……(葛野王伝)

傍線部のような状態であったところに、葛野王が子孫相承を提言し、これを女帝が容れて決着をみたと伝えている。「定國」との記述が、軽皇子の擁立内定を暗示するものと考えられる。

この葛野王伝と対照して、次の身崎壽氏の所見に注意したい。

○……人麻呂はこの行旅の目的をよく理解し、それを歌によって讃えることのできる者として一行の列に加えられたのであろう。その目的とは究極的には天武直系の軽皇子がもっとも正しい王権の継承者であることを主張することにほかならない。……(中略)……これ(筆者注　阿騎野遊猟歌)はもはや、阿騎野への行旅に供奉し遊猟に参加した一行の人々にのみ示されたものではなく、さまざまな思わくの乱れていた持統宮廷社会に高らかに発表され、軽皇子の皇位継承者としてのイメージを形成することに大きな役割をはたしたのではなかろうか。(「柿本人麻呂阿騎野の歌」。傍線筆者)

傍線を付した部分は、現在の研究者に共通の見解とみなされるものである。ところがこれは、実に高市皇子薨後の動

揺期にこそ、最も照応する評言ではないだろうか。言い変えれば、高市皇子尊健在の間は、皇嗣問題の紛糾といった事態は起こる気配はなかった。つまり通説の持統六年では、軽皇子を緊急に宣揚する時期としてはやや早すぎるのではないか、と反省されてもよいと思うのである。

こうして池田氏の持統十年説は、巻一の歌の年代順配列という規準(19)とは抵触するが、持統朝の人事の変遷を的確に見渡している点では、十分に注目されてよいものと考える。

持統十年とすれば、軽皇子は十四歳。阿騎の大野に騎乗する姿に、歌の通りの凛々しさも出てきてよい年齢である。

【注】

(1) 類似句「高光る　日の御子」も含めて、万葉集では日並皇子尊(巻二　一六七・一七一・一七三)・弓削皇子(巻二　二〇四)・長皇子(巻三　二三九)・新田部皇子(巻三　二六一)に使用している。いずれも天武皇子である。

(2) 契沖『代匠記』、宣長『玉ノ小琴』、岸本由豆流『攷証』、山田孝雄『講義』、窪田空穂『評釈』、『岩波古典大系』等の万葉集注釈書。

(3) 折口信夫全集ノート編追補第二巻『言語伝承論』第一部第三章「国語における時制」。同ノート編第九巻「祝詞」。

(4) 井口樹生氏の「『皇御孫命』考――その語義と位置をめぐって――」(『藝文研究』二七号)に詳論がある。

(5) 『柿本人麿　評釈篇上』。

(6) 『萬葉集評釈』。

(7) 「安騎野遊猟歌」(早稲田大学出版局『古代の文学2　柿本人麻呂』所収)。

(8) 「柿本人麻呂阿騎野の歌」(『万葉集を学ぶ　第二集』所収)。

(9) 「柿本人麻呂――阿騎野の歌について」(『日本文学』二六巻四号)。

(10) 沢潟久孝氏の『萬葉集注釈』の紹介するところによると、画家中山正實氏は、橿原神宮神苑にある国史館に、四八番歌に

取材した壁画を作成するにあたって、当歌の景観が現れる日時を中央気象台に問合わせ、実地に攷究した結果、持統六年十一月十七日(太陽暦では十二月三十一日)午前五時五十分と推定したという。この推定は同氏の著『壁画阿騎野の朝』に記され、「天文学的算定」などと称されて一般に紹介されるため、いかにも信頼度の高いものにみえる。しかし、これに疑いを持たれた吉永登氏の「阿騎野の歌二題」(『万葉』昭和五〇年六月)によれば、持統六年・十一月と、この二つはあらかじめ中山氏が仮定した年月だということが指摘されている。となると、「天文学的算定」というのは誤解を招く形容で、実はすべてが科学的根拠に基づくわけではない、ということになる。これは十分に承知しておく必要があるだろう。

(11) 「柿本人麿の時間と祭式――阿騎野遊猟歌をめぐって」(『鑑賞日本古典文学3　万葉集』所収)。

(12) 慶応義塾大学通信教材『国文学』。

(13) 『萬葉百歌』『柿本人麻呂』。

(14) 『萬葉集全注　巻第一』。

(15) 『王朝の歌人1　柿本人麻呂』。

(16) 例えば次のような証左がある。

▼推古紀十九年五月五日「薬ニ猟於菟田野一……」

▼けころもを春冬片設けて幸しし宇陀の大野は思ほえむかも(万葉集巻二、一九一。「(日並)皇子尊舎人等慟傷作歌廿三首」中。)

▼三代実録貞観二年十一月三日「詔ニ参議正三位行右衛門督源朝臣融一賜ニ大和国宇陀野一。為ニ臂(ツカヒ)一鷹従(タカヲオフトリヲ)レ禽之地一」

(17) 『宇陀郡史料』。

(18) 沢潟久孝氏の『萬葉集注釈』の説明に代表される。同書巻第一、三一四頁参照。

(19) これは、今日の研究者の了解事項になっていることとはいえ、あくまで編者の原則的な配列方針とみられるというほどのことである。なかには例外もある。たとえば持統朝雑歌において、最近の研究では、先に位置する近江荒都歌(二九～三一)よりも、後の吉野離宮讃歌(三六～三九)の方が制作時期が早い、との見解が有力になって来ている。これには確かな状況証拠が用意されている。このように慎重な立論であれば、年代順配列ということにかなわなくとも、それは一つの可能性ある説として尊重されるべきであろう。その点、本稿で支持する阿騎野行持統十年説は、現段階では未だ資料不十分の観

もあるので、今後その補充を課題にしなくてはならないと思っている。

【付記】

本稿は、修士論文の一部によった、昭和六二年度後期の慶応義塾大学国文学研究会の発表をもとにしたものである。各途次において御教示を賜わった諸先生方に厚く御礼申しあげる。